

京都大学富士川文庫所蔵多紀氏関連資料に関する一検討

成 高 雅

京都大学附属図書館富士川文庫は、『日本医学史』の著者富士川遊が寄贈した氏の旧蔵書の一部⁽¹⁾である。それらは、富士川氏が『日本医学史』編纂のため、参考資料として四方に求めて収集したものであり、平安期より明治初期に至るまでの日本医学に関する典籍を網羅して余すところがないと評価されている⁽²⁾。京大富士川文庫は電子化事業⁽³⁾の計画にもとづき平成30年4月26日に事業を完了し、現在所蔵の4,710件の資料全点を貴重資料デジタルアーカイブにおいて公開している。筆者は富士川文庫電子化事業の整理作業への参加をきっかけに、当文庫所蔵の多紀氏関連資料の調査を行った。本稿では、調査結果を整理し、京大富士川文庫所蔵の多紀氏関連資料の一部について検討したい。

一、研究背景

富士川文庫の多紀氏関連資料を検討する前に、江戸後期の医学考証派について簡単に紹介する。考証学という実証的・文献学的学問は、中国の清朝において一世を風靡し、江戸後期の日本儒学界でも多大な発展を遂げた。一方、江戸の医学分野においても、古典との整合性を論証する文献学を中心とする考証学派が形成された。医学の考証学派について、小曾戸洋は、次のように指摘している。

井上金峨・吉田篁墩・狩谷掖斎らと進展し確立していった日本の考証学、これらの師から直接、あるいは山本北山・大田錦城といった儒者を介して、多紀元簡・元胤・元堅、伊沢蘭軒・柏軒・棠軒、小島宝素・春沂、渋江抽斎、喜多村直寛、森立之・約之、堀川舟庵、山田業広など、江戸医学館をとりまく医家達に受け継がれた。⁽⁴⁾

江戸医学館は、幕府の医学校として当時漢方医学界の中心であった。小曾戸氏によると、医学考証派の医家は幕府医官・藩医など比較的高い身分にあり、幕府権力を背景とする有利を持った結果、文献資料蒐集の面においても恵まれていて、当時の中国をはるかに凌駕する資料を手に入れ、著述のほか校刻など書誌学上にも顕著な業績を残したという⁽⁵⁾。

医学考証学派及びその学問に関する資料は、内容の豊富さと膨大な数量に対し、全体的にあま

り重視されていない問題がある。医学考証学派の学問特性を明らかにするためには、その資料に関する基礎調査・文献整理を全般的に行う必要があると考える。

筆者が京大富士川文庫の整理作業を行った際、考証派医家の蔵書印が多見され、中に貴重な自筆本や識語・注記を加えた資料も少数ではなかった。これらの資料を整理することは、考証学派の学問的基盤復元と考察作業の一環として意義あると考える。

本稿で取り上げる多紀氏とは、日本最古の医書『医心方』を編纂した名医丹波康頼の後裔である。多紀元孝を始めとし、その子孫の元恵・元簡・元胤・元堅・元昕らも、歴代幕府の医官に任ぜられ、江戸医学館を主宰した。富士川氏は、多紀家を医学考証学派の代表と位置付けている⁽⁶⁾。多紀家・医学館の蔵書について、内閣文庫は次のように述べている。

…（彼らは）特に古医書の善本を求めてこれを収集、校勘、繕写、校刻するなど、書誌学上の業績が顕著で、同家蔵書の大部分にかれらが書き入れた朱墨点、識語、注記等がよくそれを示している…これが多紀家蔵書の価値が高い理由であり、特徴であって、また幕府医学館旧蔵書が尊重されるゆえんでもある。⁽⁷⁾

江戸医学館旧蔵書を含む多紀氏旧蔵書に関しては、森潤三郎『多紀氏の事蹟』⁽⁸⁾、小曾戸洋等『江戸医学館蔵書集散の顛末』⁽⁹⁾、天野陽介等『東博所蔵の江戸医学館旧蔵書に関する検討』⁽¹⁰⁾などの研究成果がある。小曾戸氏らが出した結論は、現在医学館旧蔵書は内閣文庫に7割近く、宮内庁書陵部に約1割、東京国立博物館に1割弱が現存し、残り1割強は行方不明である⁽¹¹⁾。こうして多紀氏旧蔵書のおおよその流れは把握されているが、実際日本及び海外の各蔵書機関において徹底的な調査を行うことにより、さらなる確認作業を進めることができると考える。これにより『聿修堂蔵書目』『存誠薬室蔵儒書目』『躋寿館医籍備考』など多紀家旧蔵目録書に基づく照合・検討なども可能となる。

上記の作業の一環として、筆者は京大富士川文庫が所蔵する多紀氏旧蔵書の調査と整理を行った。調査の結果、自筆抄録など多紀氏に関連する資料も多数あったので、全体を包括に「多紀氏関連資料」として議論する。

二、京大富士川文庫所蔵多紀氏関連資料整理

（一）整理の基準

今回の調査対象は、京都大学附属図書館富士川文庫に所蔵されており、京都大学貴重資料デジタルアーカイブにて公開された4,710件の資料である。まず、多紀氏の蔵書印に関する先行研究⁽¹²⁾に基づき、多紀氏関連の蔵書印の捺されている資料を対象とする。蔵書印は捺されていないが、聿修館の用紙を使ったものなど、自筆資料と判断できるものや多紀氏に関連すると思われる写本も対象とする。また、医学館関係（医学館版木によった翻刻、版心に「聿修堂蔵版」があるものなど）の刊本については、蔵書印が捺されていない場合は除いた。

(二) 資料目録

上記基準に従って整理し、得た京大富士川文庫所蔵多紀氏関連資料は以下の通り。

ID	タイトル	作者	冊数	巻数	刊/写年	刊/写	備考	蔵書印	分類
0266	診腹要訣	多紀元堅著	1		天保13年 (1842) 写	写	元堅自筆	存誠藥室	1
0288	翠竹翁答 問書	曲直瀬道三応 問	1		慶長7年 (1602) 抄	写		医学図書、躋寿 館書籍記	2
0296	素問參楊	多紀元堅著	4	4 巻	天保14年 (1843) 写	写	元堅自筆	臣元堅印	1
0431	紫金丹方	(朝鮮) 李宗 準著	1			写		多紀氏蔵書印、 他2	2
0774	挨穴図説		1	1 巻		写		多紀氏蔵書印	1
0910	医家千字 文註	惟宗時俊著	1			写		奚暇齋讀本記	2
0922	医官進退		2	2 巻		写		多紀氏蔵書印、 他1	3
0925	易簡方	(宋) 王碩著	1		永正14年 (1517) ⁽¹³⁾	写	朱筆校正 あり	奚暇齋讀本記	2
1007	医師秘笈	(清) 薛雪著	2	2 巻	(清) 嘉慶 17年(1812)	刊(中)		奚暇齋讀本記、 他1	2
1018	医術名流 列伝	(清) 蔣廷錫 等敕撰	14	14 巻		写	朱筆訂正 あり	奚暇齋讀本記	2
1073	医談抄	惟宗具俊著	1	2 巻		写		多紀氏蔵書印	2
1077	一万社草	(明) 盧明銓 著	8	12 巻		写	朱筆訂正 あり	奚暇齋讀本記	2
1091	乙巳隨筆	多紀元侁纂	1		弘化2年 (1845) 写	写	元侁自筆		1
1093	聿修館漫 抄(合綴: 医余偶筆)	多紀元簡録	1			写	元簡自筆	聿修館	1
1218	医林撮要 (摘録)	(朝鮮) 楊礼 寿著	1			写	元胤自筆 抄録、版 心に聿修 堂	多紀氏蔵書印	1
1264	雲岐子保 命集論類 要	(元) 張璧著	1	2 巻		写		奚暇齋讀本記	2
1579	家塾藥案		1		文化4年 (1807)	写	朱筆校正 あり、版 心に聿修 堂	他1	3
1589	家珍方	板坂宗慶著	1	1 巻		写		医学図書、躋寿 館書籍記、多紀 氏蔵書印、他1	2

1657	週年要鈔 1 卷 (上)	丹波嗣長著	1	1 卷 (上)	寛政 5 年 (1793) 写、 天保 15 年 (1844) 校 正	写	文末元簡 記あり、 元堅朱筆 校正あり	奚暇齋讀本記	2
1750	寛政医家 系図		12		天保年間	写	一部欠冊	江戸医学蔵書之 記、他 3	3
1751	寛政甲寅 考試口頭 主意書 (収: 口問 主意書、 考試問答 一件調書、 考試出席 御医師医 案方附留 記并評議)	多紀元惠輯	3	3 卷	寛政 6 年 (1794)	写	見返しに 多紀永寿 院		3
1891	救急易解 方	(朝鮮) 尹弼 商等著	1		(明) 嘉靖 2 年 (1523)	刊 (朝 鮮)		多紀氏蔵書印	2
1897	救急選方	多紀元簡著	2	2 卷	享和 2 年 (1802)	写	元簡自筆 原稿本、 版心に聿 修堂	廉夫 (末)	1
2010	切紙問書 (57 ヶ条)	意菴講・中村 光政誌	1		天正 13 年 (1585) 写	写		医学図書、躋寿 館書籍記、多紀 氏蔵書印、他 1	2
2385	香泉日鈔	多紀元胤録	1			写	元胤自筆、 版心に聿 修堂		1
2624	艮山先生 文集	後藤艮山著	1			写		奚暇齋讀本記	2
2693	雜病治例	(明) 劉宗厚 編	1			写		奚暇齋讀本記、 他 1	2
2864	史載之方	(宋) 史堪著	2	2 卷	天保 3 年 (1832) 跋	写	元堅自筆 跋	奚暇齋讀本記、 丹波元堅 (末)、 菑庭 (末)、小 梅 (末)	1
2892	疾雅	多紀元胤著	9		嘉永 7 年 (1854) 写	写	元侑写、 版心に聿 修堂		1
2906	新刊薬性 要略大全 (附: 新刊 大医院経 験捷効単 方)	(明) 鄭康寧 編	1	10 卷 附 1 卷	(明) 嘉靖 24 年 (1545)	刊 (中)		医学図書、躋寿 館書籍記、他 1	2

2924	痧疹抄方	多紀元簡著	1		享和3年 (1803)	写	元簡自筆	聿修堂、丹波元簡、廉夫(末)、元簡印(末)	1
2982	袖珍蔵秘 (合綴:外科勝積下)	(明)五雲子著	1	2巻	天保3年 (1832) 跋	写	元堅自筆跋	多紀氏蔵書印、菫庭(末)、丹波元堅(末)	1
3102	傷寒総論 (附:札記)	(宋)龐安時撰・(清)黃丕烈校	3	6巻		写	朱筆校正あり、末元簡識あり	他1	1
3232	小児医案		1		享和元年 (1801) 写	写	末元簡識あり	医学図書、躋寿館書籍記、多紀氏蔵書印、他1	2
3345	諸書雜録	多紀元琰等録	1		安政~万延年間	写	元琰・元堅朱筆校正あり		1
3490	新刻褚氏遺書	(南齊)褚澄編・(明)胡文煥校	1		延宝元年 (1673) 刊、天保4年 (1833) 勘	刊	元堅朱筆校正あり	奚暇齋讀本記、他2	1
3717	躋寿館学規	多紀元估稿・海保漁村刪補	1		文久2年 (1862) 写、3年(1863) 刊	写、刊	元估自筆稿、海保漁村自筆校正		3
3718	躋寿館諸事控		1			写	元々躋寿館学規と合綴		3
3932	素問解題	多紀元簡著	1		天明7年 (1787) 刊、享和4年 (1804) 校正	刊	元簡朱筆校正あり	多紀氏蔵書印	1
4015	太平広記医部	(宋)李昉等撰・(清)黃晟校	1	巻218-220		写	朱筆校正あり	医学図書、躋寿館書籍記、多紀氏蔵書印	2
4093	治腫秘方 (合綴:救急良方)	(朝鮮)任彦国撰	1		天明4年 (1784) 写	写	元簡朱筆校正あり	多紀氏蔵書印、躋寿館記	1
4455	読素問鈔	(明)滑寿編・周彬校点	2	3巻	弘化2年 (1845) 跋	写	元堅自筆校正、跋あり	奚暇齋讀本記	1
4699	梅花無尽蔵纂粉	中村環中編	1	2巻	享和3年 (1803) 写	写	元簡自筆識語あり	医学図書、躋寿館書籍記、多紀氏蔵書印、他1	1

4811	秘伝経験 痘科玉函 集（附： 補遺心法）	（明）丁鳳輯 撰	2	8 卷	寛政 6 年 （1794） 写	写	元簡自筆 識語あり	医学図書、躋寿 館書籍記、多紀 氏蔵書印、廣寿 院架蔵記	1
4857	病因考	後藤艮山口授	1	2 卷		写	校正あり	医学図書、躋寿 館書籍記、多紀 氏蔵書印、他 1	1
4992	屏巷随鈔	多紀元胤纂	1	2 卷 （存卷 2 の み）		写	元胤自筆、 版心に聿 修堂		1
5010	史記扁倉 伝	多紀元胤抄出	1		文化 11 年 （1814） 写	写	元胤自筆 校正あり		1
5149	本草経	多紀元簡採録	1		寛政 8 年 （1796） 写	写	自筆校正、 末元簡識 あり		1
5182	本朝医書 目録	多紀氏編	1	1 卷		写	版心に聿 修堂		1
5297	脈学彙粹	多紀元簡著	1			写	元簡自筆 写、版心 に聿修堂		1
5425	薬書		1			写		医学図書、躋寿 館書籍記、多紀 氏蔵書印、他 1	1
5790	霊枢識	多紀元簡著	5	5 卷		写	元簡自筆 原稿本	多紀氏蔵書印	1
5800	櫟窓抄録	多紀元簡著	1	1 卷	寛政 3 年 （1791） 写	写	元簡自筆 写		1

以上、合計 53 件、多紀氏関連資料を見つけることができた。

目録の項目について簡単に説明する。「ID」は京都大学貴重資料デジタルアーカイブで使われている資料番号（RB 番号）であり、<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb0000> [ID] の URL によって資料へアクセスすることができる。「タイトル」は原則富士川文庫デジタルアーカイブに登録された書名を使うが、一部、内容に基づき変更した項目がある。「作者」は原作・編集者であり、抄録資料は抄録者とする。「刊行・書写年」は明記されている資料に限って目録に入れる。「備考」の部分には、多紀氏による自筆などの情報を載せた。「蔵書印」には、先行研究⁽¹⁴⁾を参考に、多紀家蔵書印の印文を記録する⁽¹⁵⁾。

（三）資料の構成

これらの資料を四つのカテゴリーに分類する。「1」は多紀氏自著の自筆本・医書に関する自筆資料、また自筆校正を加えた旧蔵書。「2」は多紀氏の蔵書印が捺されている旧蔵書であるが、特に校勘などされていない。「3」は江戸医学館（その前身である多紀氏私塾躋寿館も含む）の関連

資料である。分類の結果、「1」29件、「2」18件、「3」6件であった。「1」は手沢資料としての価値の高さは勿論であるが、大量に収集した富士川氏の資料蒐集の苦心の跡も窺える。「2」は、多紀家の医学的関心や蒐書傾向の角度から議論する価値がある。「3」の資料は医学校における試験の出題、問答と訂正なども集めて装訂した資料と医学館の公文書類などであり、内容に出題者・回答者・関係者などの名前を明記した。医学館における人間関係を明らかにする資料を補足することができる。

書物の形態について：全53点の資料は、刊本5点、写本47点、原稿と刊行本を合綴した資料で1点ある。刊本は明刻本1点、清刻本1点、朝鮮本1点と和刻本2点である。

内容について：多紀氏自身による自著・抄録は20点あり、その中の抄録はほぼ中国の医書と典籍の医学関連内容を採録したものである。抄録を除くと中国医書14点、日本医書9点、朝鮮医書4点である。そのほか、前記医学館関連資料6点である。

注意すべき点は、富士川氏が集めた多紀氏関連資料は、主要収蔵先の内閣文庫・宮内庁書陵部・東京国立博物館の医学館旧蔵書と異なり、9割が写本資料であり、多紀氏の自筆・校正などの手沢資料が半分以上を占めていることである。富士川氏が数点の多紀氏自筆資料に解説を加え付箋が残っており、氏が『日本医学史』を著する際に、これらの資料を参考にしたことが推測できる。多紀氏及び医学考証学派を研究するための貴重な資料であると認められる。

三、資料の検討

今回の整理で知り得た多紀氏の自筆朱墨点、識語、注記、跋などを加えた写本資料は多数あり、以下に一部の資料について、資料番号順に抄写の経由や成書の過程などについて検討する。

1. 一万社草

資料番号 rb00001077 の『一万社草』⁽¹⁶⁾ 八冊、十二卷写本。

『一万社草』は明・盧明銓が撰述・整理した明末浙江省湖州府で活動する医療団体「一万社」に関する記録である。内容は実際の治療案（カルテ、医案）から、食物療法・急病処方集・医学に関する記述（医論）などを収載している。該書は『烏程県志』『湖州府志』などの地方誌に書名が記録されるのみで、中国の医学目録書ではすべて佚書として扱われている⁽¹⁷⁾。しかし、多紀元胤の『医籍考』では「存」とされている。『中国古籍総目』には、「子部、医家類・方論、内科・内科通論」に「一萬社草十二卷・明盧明銓輯・明天啓間刻本・無錫（存卷一至八）」⁽¹⁸⁾として収録されている。『中国古籍総目』所載八卷本は、江蘇省無錫市図書館に所蔵されており、2011年「中華古籍保護簡報」⁽¹⁹⁾に、該書は無錫図書館本と日本京都大学図書館蔵写本だけが残っていると紹介され、2013年には中国『第四批国家珍貴古籍名録』⁽²⁰⁾に無錫図書館本の書影と書誌だけが収録された。「中国古籍保護簡報」が言及した京都大学図書館蔵写本は、この富士川文庫本（rb00001077）を指している。

『名録』によると、無錫市図書館が所蔵する明天啓刻本は卷一～八（冊数未公開）のみの残本である⁽²¹⁾。富士川文庫が所蔵する写本は、各巻題辞・序文・跋などを含め、十二巻全てがそろった完本写本であり、書写者は不明だが、各冊冒頭に、多紀元堅の蔵書印「奚暇齋讀本記」がある。本文には誤写に対する多紀元堅自筆と思われる朱筆訂正がある。

前記森氏の研究に、天保14年（1843）多紀元堅が所蔵医書百部を選出し、医学館に寄贈した明細書「寄贈医書目録」の記録が残されている。その目録には、

一、一万社章十二卷 鈔本 十二冊⁽²²⁾

と記載されている。残念なことに、この資料は戦災で焼失してしまった。この「章」は誤字である確証はないが、『一万社草』を指していると考えるのが自然であろう。医学館に寄贈した十二冊本は、冊数から見れば富士川本の八冊本と異なる版本である⁽²³⁾。富士川本は多紀元堅が十二冊本を寄贈する前に、複製として写したものではないだろうか。『名録』所載の刻本の書影と比較したところ、数箇所違っている⁽²⁴⁾が、行数・字数また版式は刻本と同じである。富士川本は天啓刻本、また天啓刻本の複製（写）本を底本にして写した可能性が考えられる。

また、富士川本は京大貴重資料デジタルアーカイブに「一万社草8巻」と誤って書誌登録されている。恐らく中国側は富士川本をこの誤記に基づき八巻残本と考え、これまで重視してこなかった。筆者は富士川本巻十二に記載された医学団体の活動記録を資料として使い、明末の医学団体と当時の医療政策を考察するという医療社会史的研究を行った⁽²⁵⁾。

2. 素問解題

資料番号 rb00003932 の『素問解題』⁽²⁶⁾ 一冊、附「難経解題」、天明7年（1787）躋寿館刊本。

該書は多紀元簡が経学の解題に倣って『素問』と『難経』の解題を書いたもので、元簡早期の医書考証著作である。この富士川本は出版17年後、享和4年（1804）に元簡が自筆校正を加えた書籍であり、資料価値が高い。富士川氏が表紙に付箋を付け、

素問解題 一卷 多紀桂山著

此書ハ桂山晩年ニ反ヒテ、筆ヲ加ヘ、更ニ修補セレモノ。其朱若クハ墨ニテ記セルハ皆桂山ノ手録タリ

と多紀桂山の手沢本と認めている。巻末に、

是予三十歳時所撰著、考證荒疎、文詞鄙俚、深慚。甲子仲冬元簡記

（予が三十歳の時著したものであり、考証が不謹慎で文辞が卑しい。ひどく慚愧に堪えない。）とある。のちの天保8年（1837）に刊行した元簡の素問注釈書『素問識』には、この改補した『素問解題』が巻首に付せられていることも確認できた。

3. 治腫秘方

資料番号 rb00004093 の『治腫秘方』⁽²⁷⁾ 一冊、『救急良方』との合綴本。

序によると、『治腫秘方』は著者朝鮮・任彦国の著述を、全羅道觀察使の安瑋が嘉靖38年（1559）

に刊行したという。内容は膿腫治療に関する外科治療法。合綴した『救急良方』は安瑋が集めた急病処方集。写本の最後に多紀元簡の

右朝鮮刻本、養安院越公所蔵、甲辰閏月鈔而得之。

という識語がある。これによると、多紀元簡は養安院越公所蔵の朝鮮刻本を借用し、天明4年(1784)に該書を写したことが解る。養安院とは江戸初期の医学者曲直瀬正琳(1565-1611)の院号であるが、彼の子孫も代々この院号を称し、「養安院蔵書」などの蔵書印を使用している。五代目正珪(1686-1784)は越智雲夢と称し、「雲夢越公」⁽²⁸⁾とも多く記載されている。元簡が記した「養安院越公所蔵」は、越智雲夢の旧蔵を指していると考えられる。

この写本を探るには、同じ富士川本である『治腫秘方』朝鮮刻本(資料番号rb00004094)に着目する必要がある。この朝鮮本は嘉靖38年(1559)の序があり、内容や版式から見ると多紀家所蔵写本と同じ系統である。さらに「養安院蔵書」「養安」の曲直瀬家が使用した蔵書印が捺されていたことから、多紀元簡はこれを底本にして写した可能性が高いと考えられる。

しかし、朝鮮刻本『治腫秘方』には乱丁が見られる。『治腫秘方』は、『治腫秘方』と『救急秘方』との合綴本であるが、この本は『治腫秘方』の序と本文の間に『救急秘方』が綴じられている。恐らく多紀氏の抄写の後、朝鮮刻本は改装などが行われ、その過程で乱丁したのではないだろう。朝鮮刻本の最後のページに、「寛政三… 改表紙。越智恒幸」と署する識語がある。曲直瀬八代目である越智正隆(1772-1848、幼名は幸次郎・恒幸)が、寛政3年(1791)に表紙を改装し、その際乱丁したのであろう。

また、富士川本写本と朝鮮刻本の画像を、フォトショップを使い透明度を上げ重ねた結果、全く一緒ではないが、ほぼ一致し、字形も似ている。影写や臨写のように、字形はそのまま継承していないが、字配りや字の大小は親本通りのものと考えていい。また写本の誤字に対し、元簡が朱筆で数箇所校正を加えている。比較したところ、写本は親本の内容と形態を忠実に再現しようとしたことが明確で、多紀家所蔵写本の価値もこの一例で窺える。当写本を含め、多紀家所蔵の幾つか写本の写し方について、今後さらに検討したい。

4. 読素問鈔

資料番号rb00004455の『読素問鈔』⁽²⁹⁾二冊三巻、写本。

該書は明・滑寿が『素問』の内容を選んで、再編したものである。一般に流通したのが明・汪機が続注を加えた嘉靖刻本だが、この写本は弘治9年(1496)周彬による校刻本を底本にしたという。巻末に多紀元堅の自筆跋に該書を得た経緯が記されている。

滑伯仁讀素問鈔、世唯傳汪氏續註。此本原係于弘治中周彬校刻、實在汪氏之前。先教諭晚年獲吉田氏稱意藏舊鈔本、以謂此真滑氏之面目、深加珍愛。今使門生中山太玄錄其副、手自校勘併識其後。弘化乙巳復月丹波元堅

(大略：滑伯『読素問鈔』は、汪機の続註のみが世に伝わっている。この本の定本は弘治年間に周彬が校正・出版したものであり、機本より古いものである。父元簡は晩年、この吉

田称意蔵旧鈔本を手に入れ、この本こそ滑伯の原本の状態を忠実に伝えるものであると言い、深く愛蔵した。今、門人の中山太玄に副本を作らせ、私はそれに校勘を加え、書末に識語を書いた。）

この跋によると、多紀元簡は晩年この吉田家旧蔵鈔本を手に入れ、弘治刻本の鈔本のため滑寿原本に忠実であるためにこれを重宝した。元堅は門人の中山太玄を使って副本を作って、自ら校勘と識語を加えたことも明記した。抄写の底本と考えられる吉田家旧蔵鈔本『讀素問鈔』3巻は、現在東京国立博物館が所蔵する（資料 ID1000055892）⁽³⁰⁾。巻首に「吉家氏蔵」「稱意館藏書記」「多紀氏蔵書印」「躋寿殿書籍記」「医学図書」の印記があり、吉田家から多医学館への移動がわかる。

また資料番号 rb00003232『小児医案』⁽³¹⁾、資料番号 rb00004699『梅花無尽蔵纂粉』⁽³²⁾など、多紀氏が自筆で識語を書き、抄写の底本と時間を明記した写本資料があり、更に検討する余地がある。

5. 靈樞識

資料番号 rb00005790 の『靈樞識』⁽³³⁾ 五冊、五卷写本、現蔵巻一～五。

『靈樞識』は多紀元簡が書いた『靈樞』の注解・研究書であり、全六巻。文久3年（1863）に江戸医学館が木活字版刊行したが、ほとんど流布しなかったという⁽³⁴⁾。この資料は多紀家蔵書印がある上に、丁寧に校正と補注が書き込まれているが、最後の巻六がないため、資料の性質がわかりづらくなっていた。調査の結果、欠けている巻六は、慶應義塾大学富士川文庫（書誌 ID：100245188）に所蔵されていることが判明した。慶應富士川文庫にある『靈樞識』⁽³⁵⁾ 巻六の写本の最後に、

文化六年己巳歳冬十有一月十六日南至良辰時輟卷 丹波介後人 丹波元簡廉夫 記

嘉永四年辛亥歳五月九日 元琰元佶読校

文久元辛酉季夏望一校了 昶記

と書かれている。また文久3年刻本の跋には、以下のように述べている。

右先祖考所撰靈樞識六卷。向僅行鈔本。琰先君深憾其傳之不遠。將為刊本。以公於世。乃與佶先兄謀。命佶琰從家所藏稿本。重加訂正。未及付梓。而先君先兄不幸後先即世。不肖等以菲材猥忝先職。恒恐是舉之荏苒不果。無以仰奉先志。會醫覺新開活字局。遂俾千賀久徵、餘語瑞信及佶嗣子元昶等。更相讎校。從活字刷印。裝成數部帙。庶乎與素問識並行。均為讀此經者之津筏。雖未能若板本之精善。而抑亦先君先兄表章遺書之意歟。蓋嘗考之。此經與太素經互相參對。旨義較然。不假旁引曲證者有之。從前諸家之說。更似駢拇枝指者有之。惜當日其書仍未出。俾其出先祖考在日。其所辨訂補正。宜何如也。刻已告竣。並附著斯言。使后學有考焉。

文久癸亥仲秋 孫元佶元琰拜手謹誌

（大略：右の書籍は、祖父元簡撰『靈樞識』六巻である。今まで鈔本しか無かったが、流通しないことを遺憾に思い、出版しようと考えた。そこで父は私の兄の元佶と計り、兄と私元琰に家蔵の稿本に拠り重ねて校訂することを命じた。しかし、父と兄が世を去ってしまった。

私は浅学不才で先輩を煩わせ、余計な物を付け足し仕事を果せない事を恐れたが、祖父の意向をないがしろにはできなかった。医校が新たに活字局を開いたので、……活字で数部を印行した。……)

つまり、京大富士川文庫五巻と慶應富士川文庫一巻合わせた稿本は、多紀家所蔵『靈枢識』の稿本の可能性が高い。調べたところ、文久3年活字本は、稿本の校正と補修を殆ど反映している。多紀元琰・元佶らは稿本に校正を加え、その稿本に基づき活字本を刊行したと考えるのが自然であろう。

しかし跋に述べるように、写本には朱・青・墨三色の書き入れ及び補足のほか、本文の筆も巻四から変わり、複数の人間が作業にかかわったことは明らかである。書写者や成書過程については、更に検討する必要があるだろう。

四、今後の課題

京都大学貴重資料デジタルアーカイブ富士川文庫のホームページによると、現在京都大学図書館機構と慶應義塾大学メディアセンターは、「富士川文庫デジタル連携プロジェクト」（通称「デジタル富士川」）に関する覚書を締結し、デジタル画像相互運用のための国際規格 IIIF⁽³⁶⁾ を用いて、両大学が所蔵する古医書コレクション「富士川文庫」の画像データを統合表示する試行ウェブサイトを開示した⁽³⁷⁾。公開資料件数は現在、京都大学 4,710 件、慶應義塾大学 450 件である。慶應富士川文庫は今後約千件以上を順次追加予定していることも述べている。当サイトは、「両大学が分散して所蔵する富士川文庫資料を一堂に公開することを通じて日本医学史の研究・発展に寄与するとともに、IIIF を活用した分散コレクションの仮想統合例を提示する」と述べている⁽³⁸⁾。筆者は今後、このような分散コレクション仮想統合例に倣って、医学考証派に関するデータベース作成を目指し、人文情報学の技術を活用して資料のあらゆる情報を取り込みと考えている。

今回は京大富士川文庫に所蔵する多紀氏関連資料の整理を通し、文庫の数点の資料を検討した。今後は医学考証派の旧蔵書と関連資料を更に調査・整理することが必要であり、彼らの著述と関連資料における学問手法と清朝考証学との比較検討が次の課題となる。

注

- (1) 京都大学附属図書館の他、富士川文庫は、慶應義塾大学信濃町メディアセンター 北里記念医学図書館 (<http://www.med.lib.keio.ac.jp/collection/collection.html>)・東京大学附属図書館富士川文庫 (<http://rarebook.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gazo/cgi-bin/col.cgi.cgi>)・日本大学図書館医学部分館（穴沢順子：日本大学医学部図書館所蔵の古医学資料とその利用、医学図書館 41 (2)、p157-158、1994）にも所蔵されている。
- (2) 京都大学附属図書館：『京都大学附属図書館六十年史』第3章第3節、p197-219、1961

- (3) 富士川文庫の電子化事業は、平成 10 年度から進められたが、平成 28 年度及び平成 29 年度に行った大規模な電子化事業によって、平成 30 年 4 月 26 日に至って全点公開された。平成 28-29 年度電子化事業の詳細は <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/fujikawa> を参照。
- (4) 小曾戸洋：「漢方のたからもの (14) 多紀元堅と考証医学」、『漢方と診療』、東洋学術出版社編、p196-197、2010
- (5) 小曾戸洋：「漢方のたからもの (14) 多紀元堅と考証医学」、『漢方と診療』、東洋学術出版社編、p196-197、2010
- (6) 富士川遊：『日本医学史綱要』、克誠堂書店、p183-186、1933
- (7) 国立公文書館内閣文庫：『内閣文庫蔵書印譜』改訂増補版、p28、1981
- (8) 森潤三郎：『多紀氏の事跡』、思文閣出版、1985
- (9) 小曾戸洋等：「江戸医学館蔵書集散の顛末」、『日本医史学雑誌』56 (2)、p242、2010
- (10) 天野陽介等：「東博所蔵の江戸医学館旧蔵書に関する検討」、『日本医史学雑誌』56 (2)、p241、2010
- (11) 小曾戸洋等：「江戸医学館蔵書集散の顛末」、『日本医史学雑誌』56 (2)、p242、2010
- (12) 国立公文書館内閣文庫：『内閣文庫蔵書印譜』改訂増補版、p27-37、1981
渡辺守邦等編：『増訂新編蔵書印譜』、青裳堂書店、p581-584、2014
- (13) この資料は、外題に「簡易方永正中古写本」とあり、跋に永正十四 (1517) に書写したことが記載されている。富士川文庫は永正 14 年写本として登録されているが、実物を確認し、紙の状態など考えると、永正 14 年に写したものと考えることはできない。また多紀元堅の蔵書印が捺され、装訂・版式・筆跡なども多紀元堅関連の写本と非常に似ている。多紀元堅或いは関連ある人物により、某永正写本を底本として抄写した可能性が考えられる。
- (14) 国立公文書館内閣文庫：『内閣文庫蔵書印譜』改訂増補版、p27-37、1981
渡辺守邦等編：『増訂新編蔵書印譜』、青裳堂書店、p581-584、2014
- (15) 蔵書印には「京都帝国大学図書之印」「富士川遊寄贈」「富士川家蔵本」などのいずれかはすべての資料に含まれているが、略記する。
- (16) 『一万社草』、京都大学附属図書館富士川文庫所蔵、<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00001077>
- (17) 確認したところ、『中國醫籍通考』（上海中醫學院出版社、1991）、『浙江醫籍考』（人民衛生出版社、2008）、『中國古醫籍書目提要』（中醫古籍出版社、2009）等では該書を佚書としている。『中國中醫古籍總目』（上海辭書出版社、2007 年）未収録。
- (18) 中国古籍総目編纂委員会：『中国古籍総目』、中華書局・上海古籍出版社、2009
- (19) 中國國家古籍保護中心：「中華古籍保護計畫簡報」46、p3、2011
- (20) 国家図書館等：『第四批国家珍贵古籍名録』、国家図書館出版社、2014。以下『名録』と略記する。
- (21) 筆者は 2017 年 10 月、無錫図書館に調査に赴いたが、該書天啓刻本はデジタル作業中のため閲覧することができなかった。現在もデジタル資料公開されていないようである。
- (22) 森潤三郎：『多紀氏の事跡』、p67、思文閣出版、1985
- (23) しかし、ここの十二冊本は未だに見つかっていない。
- (24) 拙稿「明末医学団体“一万社”研究—基于京都大学富士川文庫本『一万社草』的考察」（中国語）を参照。『浙江和東亜会議論文集』、2018 年 12 月出版予定。
- (25) 同上。
- (26) 『素問解題』、京都大学附属図書館富士川文庫所蔵、<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00003932>
- (27) 『治腫秘方』、京都大学附属図書館富士川文庫所蔵、<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00004093>
- (28) 『徂徠先生素問評』、京都大学附属図書館富士川文庫所蔵、<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00003944>

- (29) 『読素問鈔』、京都大学附属図書館富士川文庫所蔵、<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00004455>
- (30) 『読素問鈔』、東京国立博物館 TNM library stacks 新書庫所蔵、資料 ID10035191
- (31) 『小児医案』、京都大学附属図書館富士川文庫所蔵、<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00003232>
- (32) 『梅花無尽蔵纂粉』、京都大学附属図書館富士川文庫所蔵、<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00004699>
- (33) 『靈枢識』、京都大学附属図書館富士川文庫所蔵、<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00005790>
- (34) 小曾戸洋：『日本漢方典籍辞書』、大修館書店、p406、1999
- (35) 『靈枢識』、慶應義塾大学医学部富士川文庫所蔵、<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100245188/viewer>
- (36) IIIF とは、International Interoperability Image Framework の略称である。画像へのアクセスを標準化し、ネットにおけるデジタル資料の相互運用性を確保する規格を定める。詳細は <https://iiif.io/technical-details> を参照。
- (37) 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ富士川文庫：<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/fujikawa> を参照。
- (38) 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ富士川文庫「富士川文庫デジタル連携プロジェクト」を参照。
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/fujikawa>
http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/rdl/digital_fujikawa/index.html